



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	地域の居場所の在り方：札幌市「創成東よってこ！おちゃのま」の活動を事例に
Author(s)	長原, 未来
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	学士
Issue Date	2026-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99145
Type	bachelor thesis
File Information	mnagahara.pdf



令和7年度卒業論文

地域の居場所の在り方
—札幌市「創成東よってこ！おちやのま」
の活動を事例に—

北海道大学文学部

人間科学コース 地域科学研究室

指導教員 宮内泰介

学生番号 01222112

氏名 長原未来

目次

1 はじめに	3
1-1 研究の背景と目的	3
1-2 先行研究、「居場所」概念の整理	4
1-3 調査の方法と調査対象の概要	5
1-3-1 調査の方法	5
1-3-2 調査対象「おちやのま」の概要	6
2 「おちやのま」の成立過程と概要	8
2-1 「おちやのま」の歴史	8
2-1-1 おちやのまの始まり	8
2-1-2 現在の姿へ	9
2-2 運営方針や理念	12
2-3 おちやのまの雰囲気	12
2-3-1 包容力のある空間としてのお寺-「拒まれていない」感覚-	12
2-3-2 日常と非日常の混在	13
3 おちやのまを支える存在	14
3-1 運営者としてのSさんとKさん	14
3-1-1 おちやのま責任者のSさん -「やりすぎない」運営-	14
3-1-2 北海寺住職のKさん-おおらかさが場を開く-	16
3-1-3 SさんとKさんのスタイル	19
3-2 大学生ボランティア大人と子供の「中間」ー	19
3-2-1 「橋渡し」できる存在	19
3-2-1-1 世代間の橋渡し	19
3-2-1-2 初参加者を巻き込む力	21
3-3 常連の大人たちーそこにいるということー	22
3-3-1 経験を活かすシニア世代	22
3-3-2 親達の過ごし方と見守りを「委ねる」ということ	24
3-3-3 常連の大人達が支える日常のような空気感	25
3-4 一期一会の出会いー新しい風ー	26

3-4-1 「連れてくる」文化	26
3-4-2 ご近所さんによる支え	27
3-4-3 「支える」とは言わない支えのかたち	28
4 おちやのまを「共につくる」存在としての子ども達	29
4-1 子どもは「お客さん」ではない	29
4-2 「支援する・支援される」構図からの脱却	30
4-3 支援ではなく「共創」へ	31
5 おちやのまでの「役割」	32
5-1 役割を固定しないという選択	32
5-2 「好きにやっていいよ」という言葉	33
5-3 場を支える役割の在り方	34
6 おちやのまを支える「想い」と「繋がり」の力	35
6-1 「好き」という動機が生み出す継続力と包摂力	35
6-2 「曖昧さ」が持つ機能	35
6-3 関係性の揺らぎが生む居場所の強度	36
6-4 居場所が果たすべき役割の再検討-「共に」場を作る意識-	37
7 おわりに	39

1 はじめに

1-1 研究の背景と目的

近年の少子化や核家族化の進行、働きながら子育てをする女性の増加、不登校問題などにより、家庭や学校がこどもたちの「居場所」としての役割を十分に果たせずにいることが指摘されている（斎尾ほか、2007）。また、山下（2007）は不審者の存在や交通事故など、こどもの周りに様々な危険が迫ってきたことによって地域までもが子どもにとって危険な場所として認識され始めていると主張している。つまり、地域や地域のコミュニティもまた「居場所」としての役割を果たしているとは言えない状況に陥っているのである。このように、子どもが「地域社会から乖離」してしまっている状況下で、安全で充実した居場所づくりの整備が求められている。

しかし、居場所づくりの実践・運営には資金難や人手不足など、様々な課題が伴う。これらの課題の対処法や、持続可能な運営方法は様々な角度から検討されている。資金難、ボランティアの不足、受け入れ人数等の課題により、子ども食堂の継続的な運営が困難になっている状況を受け、持続可能な運営の在り方について模索した岩垣（2020）は、スタッフが役割分担をしながら適材適所で個々の能力を発揮し、活動することが継続的な運営において重要だと論じた。また、滝口（2023）は、居場所づくりの実践を持続可能なものとするためには「それに取り組む人々をどう育てていくか」という点が欠かせないと主張しており、担い手を作想的に増やし、育てていくような制度的取り組みが不活発である現状を批判した。

このように、居場所づくりの実践における制度的脆弱性や連携の在り方、人手不足などの運営上の課題は、繰り返し指摘されているにもかかわらず、大きく改善されているとは言い難い現実がある。

居場所に関する既存研究の多くは、制度設計や支援体制、あるいは利用者である子どもや若者の側に焦点を当ててきた。一方で、場を日常的に支えているスタッフやボランティアといった担い手の背景や属性が居場所づくりにどのように寄与しているか、という視点で論じられている研究も存在する。執行（2024）は、居場所づくりの実践は心理カウンセラーなどの「専門家（専門性）」のみに支えられているのではなく、地域の人々やボランティアをはじめとする「専門家ではない」人々も重要な役割を果たしていると主張している。そしてその重要性は、日々のたわいもない雑談など、人間関係の構築という面で顕著に表れるという。また、木村（2024）は、子ども食堂の継続的な運営のための工夫として、「運営に抱える1人1人を活かす」ということを挙げている。つまり、全体の把握など、コーディネーター的役割を担う運営スタッフを中心に、多彩なスタッフがそれぞれの個性を活かし、チームワークを高めていくことが必要なのである。これらの先行研究から、スタッフや「そこにいる人」の個性や属性の豊かさが居場所の豊かさにも繋がると考えられる。しかし、スタッフ

やボランティアの属性、動機、関わり方といった個人的な要素が、居場所の雰囲気や持続的な運営にどのような影響を与えているのかについては、十分に検討されてきたとは言えない。

筆者自身、フリースクールでのボランティア経験を通じて、制度や仕組み以上に、スタッフ一人ひとりの姿勢や熱意、スタッフ同士の関係性のあり方が、居場所利用者の居心地や継続性に大きく関わっていることを実感してきた。人手不足が課題として語られる現在において、単に人数の確保を問題とするのではなく、「どのような人が、どのような思いで関わっているのか」という視点から居場所づくりを捉え直す必要があると考える。

そこで本研究では、様々な立場や背景をもつ運営スタッフや大学生ボランティアなど、居場所を支える人々に焦点を当てる。そして彼らがどのような「想い」で居場所づくりに関わっているのかを明らかにし、「属性」や「想い」、「関係性」のような要素が、地域の中の「居場所づくり」にどのような影響を及ぼし、支えているのかを明らかにすることを目的とする。

1-2 先行研究、「居場所」概念の整理

「居場所」という言葉は、教育・福祉・地域づくりなどさまざまな分野で用いられている。この言葉は、不登校やひきこもり、子どもの貧困など社会的孤立の問題が注目される中で、学校離れの子供を対象としたフリースクールの展開を契機に社会的に認知されてきた。

研究の中では、居場所は大きく3つの側面から論じられている。1つは心が落ち着ける心理的側面、2つは仲間や地域との関係性を通じた社会的側面、3つは実際に人が集まり活動する物理的な空間としての側面である。これらはいずれも、自己と他者との関わり合いの中で生まれる要素であり、居場所は単なる場所ではなく、人と人との関係のあり方を含んだ概念であるといえる。荻原（2009）は、居場所を構成する要素として（1）場所性（2）身体制・関係性（3）時間制の3つを挙げている。その意味で居場所というのは、自己と他者・事物・自然との応答的な関係において生成し、生きられた身体（身体的自己）において感得される「わたし」の生成母体であると述べている。つまり、居場所と物理的な空間にとどまらず、他者との関わりによって育まれる関係的な現象として理解されてきたのである。そこで本研究においても、居場所を「人が安心して存在し、関係の中で自分を表現できる場」として捉え、その形成と維持に関わる人々の想いに焦点を当てる。

また、これまでの居場所研究や地域福祉の実践では、しばしば「支援する側」と「支援される側」という二分的な関係構造が表れていた。特に子どもや高齢者、ひきこもり状態の人など、社会的に弱い立場に置かれやすい人々を対象とした「ケア」の文脈では、居場所は「支援を提供する場」として語られることが多い。しかし、この上下関係とも捉えられる構図のもとでは、支援される人は常に受け身の存在となり、場における主体的な関わりや相互作用の側面が見えにくくなるという課題がある。近年では、こうした一方向的な関係を問

い直し、居場所を人と人との対等な関わりの中で捉え直そうとする動きも見られる。例えば森（2019）は次のように述べている。

社会的課題をかかえた者をむやみに拒絶することでは問題は解決しないし、かといって過剰なケアはいつその生きづらさをもたらしかねない。これに対し、誰もがなんらかの社会的課題を持つ（あるいは持ちうる）当事者であると理解することで対等であると理解することによって、当事者に対する身構えない態度を取ることが新たな支援を生む可能性があり、また社会的居場所はそういった身構えない態度を育む場ともなるだろう。

このように森（2019）は、社会的課題を抱える人々を一方的に排除することや、過剰なケアによって保護の対象として囲い込むことは、当人の問題の解決にはつながらないと指摘する。そのうえで、誰もがなんらかの社会的課題を抱えうる当事者であるという姿勢を取ること、当事者に対する身構えない態度が生まれ、そこから新たな支援の可能性が開かれると述べている。さらに、社会的居場所は、そうした身構えない態度を育む場として機能するとされている。この指摘は、「支援やケア」を特定の役割や行為として捉えるのではなく、関係性の中で現れるものとして再定義する視点を示している。すなわち、居場所とは「支援を行う場」ではなく、「支援が生まれうる関係性が育まれる場」として理解することも可能なのである。このような視点に立つことで、「支援する・される」という固定的な枠組みを超えた居場所の可能性が見えてくる。

1-3 調査の方法と調査対象の概要

1-3-1 調査の方法

前述の背景と目的を踏まえ、本研究では、聞き取り調査と居場所づくりの実践の場における参与観察に重点を置き、併せて文献調査を行った。本研究は地域の居場所である「創成東よってこ！おちゃのま」に関わる人々の関係性や場の成り立ちを明らかにすることを目的としている。従って、その場の空気感や参加者の言葉にならないニュアンスを丁寧に捉えることができる方法が好ましいと判断し、このような手法を取った。聞き取り調査・参与観察のフィールドとした居場所づくりの実践は、札幌市中央区の北海寺にて展開される、「創成東よってこ！おちゃのま（以下『おちゃのま』とする）」という活動である。

おちゃのまでの聞き取り調査・参与観察に際して、2025年5月から2025年9月までの約5か月間、月に2～4回程度の頻度で大学生ボランティアスタッフとして運営活動に参加した。1回の観察時間は約4時間である。そして参加した日の子どもたちや運営スタッフ、

ボランティアの様子や会話（著者との会話を含む）をできる限り具体的にフィールドノートに記録した。その場での記録が困難である場合は、記憶が新しいうちに思い出しつつ記述する方法を取るものとした。また、責任者の S さんと北海寺住職の K さんに対して半構造化インタビューを行い、許可を取って録音させていただいた。

調査に当たっては、対象者に研究の趣旨を説明し、同意を得たうえで記録を行い、個人が特定されることのないよう、S さん・K さんを含め本文では仮名を用いている。また、子供にも深く関わる調査であることから、特に 2 つの点に留意した。1 つは子どもへの直接的な質問は行わないこと、2 つは個人情報やセンシティブな内容は匿名化し、厳重に保管することである。

筆者自身の立場にも言及する。筆者は大学生ボランティアとしておちやのまの運営に関わっており、その立場は観察に影響を与え得るものである。ときに子どもと遊び、ご飯を食べる友達のような存在であり、ときに運営について協議するスタッフの一員であり、その立場は揺れ動く。筆者自身の存在がどのように場に影響を与えているのかという点について可能な限り自覚しながら調査を進めた。

1-3-2 調査対象「おちやのま」の概要

調査対象である「創成東よってこ！おちやのま」の概要を説明する。

おちやのまは北海道札幌市の中心部に近い「創成東地区」を中心に活動している NPO 法人 E-LINK（以下 E-LINK）が北海寺というお寺を拠点にして運営する活動の一つである。毎週月曜日（祝日を除く）15:00～19:00 頃までお寺を開放し、地域の大人から子どもまで、誰でも出入りすることが可能である。基本的に運営スタッフと複数のボランティアが常駐している他、寺に訪れる地域の大人と共に子どもを見守りつつ運営されている。

おちやのまは主に 2 つの機能を併せもつ。

1 つは地域食堂としての「食を共にする場」としての機能である。地域食堂とは、おちやのまの活動時間の一部を利用した活動である。ボランティアが調理した食事を 17:30 ごろからお寺の法要室で配膳し、子ども達やスタッフ、ボランティアが皆同じ場所で食事をするというものだ。子ども 1 人につき 100 円、大人 1 人につき 500 円と食事料金はかかるが年齢の制限はなく、生後数か月の赤ちゃんから高齢者まで、毎回およそ 30～50 人程度が訪れる。幅広い年代が食事を共にする、多世代交流の場であり憩いの場となっている。配膳と使用した食器の片付けについては、大人も子どもも平等に自分で担う文化があり、完全に「お客さん」として扱われるわけではない点に特徴がある。これはおちやのまに継続して参加している人にとっては自然に行う行為として馴染んでいるため、「食事を提供する・提供される関係」というより「共同して地域食堂を成り立たせる」関係性が生まれている。

2つは子どもをはじめ、地域の人々がお寺で自由に過ごすことができる「開かれた居場所」としての機能である。この時間は「これをしよう」という明確なプログラムを持たず、人々はお寺の本堂や境内で各々自由に過ごすことができる。1例として、とある日の食後の様子を紹介したい。

【2025年9月1日のフィールドノートより】

(地域食堂で) ご飯を食べ終わった後は、元気が有り余る子ども達を追いかけて本堂で遊びが再開されるのが常である。今日は雨なのもあり、本堂で遊んでいる子がいつもより多い。いつもの鬼ごっこ以外にも、ボッチャや黒ひげ危機一髪、恐竜のおもちゃを分解している子など、各々がやりたい遊びを楽しんでいる。お母さんたちも法要室に残って世間話に花を咲かせている人、子どもに付き添って遊ぶ人など様々である。

今日は珍しく遅い時間まで子ども達との「達磨さんが転んだ」が続いた。大学生ボランティアも子供をおんぶしたり、全力で走ったり、子供に戻ったように全力で遊んだ。20:30くらいまで続き、お母さんの「帰るよ」という一声でしぶしぶ遊びは終了した。残念そうな顔の子ども達をお寺の玄関まで見送り、片付けに取り掛かる。

このように、子どもも大人も「基本危なくないのであれば何をしていてもいい」というのがおちゃのまの方針である。子ども達は本堂で鬼ごっこをしたり、勉強をしたり、寺にあるおもちゃで遊んだりと思い思いの過ごし方を選択できる。子どもの親をはじめとする地域の大人達は、ボランティアと共に子ども達を見守りつつ世間話に花を咲かせたり、一緒に遊んだりするなど、こちらも好きに過ごすことができる。そしてこの点は大学生ボランティアも例外ではない。子どもと積極的に遊ぶのも大切な役割の1つだが、「少し疲れている」だとか「子どもと関わるのは少し苦手」といった事情から遊びよりも片付けに精を出すなど、ボランティアとしての運営への関わり方も柔軟に選択することができる。

この2つの機能がゆるやかに共存しおちゃのま独特の文化を形成している。

おちゃのまの活動開始までの過程やその後の歴史については第2章で詳しく言及する。

2 「おちやのま」の成立過程と概要

2-1 「おちやのま」の歴史

2-1-1 おちやのまの始まり

おちやのまの始まりには、北海寺住職である K さんと、おちやのまを運営する E-LINK との関係性が深く関わっている。北海寺と E-LINK の以前の活動拠点がご近所さんであったこともあり、K さんはもともと E-LINK の代表と親交があったという。当時 E-LINK は学童保育を運営しており、日頃からスタッフや子ども達と挨拶を交わす仲であった。

【2025 年 8 月 25 日 住職 K さんへのインタビューより】

もともと近所のゲストハウスで（E-LINK が）学童を運営してて、子供を連れてお寺の前を通ったりするから声かけたりしてた。そのうちに、お寺に学童の子ども達を連れて遊びに来るようになったんだよね。本堂に行ったり、この境内で遊んだり。俺がほら、草取りしてたりしてると通るから、声かけてさ。子供が「私もやりたい」とか言って手伝ってくれたりね。

今（おちやのまに）来てる中 2 の子とかはほんと小学校 2 年生ぐらいの時、6 年前くらいからきてくれた。俺が外で雪割りやってるのを見て「私もやりたい」って言って手伝ってくれたりして。

このように、1つのプロジェクトとしておちやのまが成立する以前から、北海寺では子ども達の出入りや交流があり、意図せず前身のような形が出来上がっていた。また、E-LINK のスタッフとも親しく、気軽に会話をするご近所さんのような関係性ができあがっていたのである。

ところで K さんは、以前よりとある想いを抱いていた。それは、「北海寺の施設を有効活用し、地域に開かれた場所にしたい」というものである。

【2025 年 8 月 25 日 住職 K さんへのインタビューより】

北海寺に来て（住職となって）まず思ったのが、「こんなに立派な施設があるのに、全然使われていない！もったいない、無駄になってる！」ということだった。俺が来たばかりのお寺の状況としては、まずお葬式は滅多にここでやらなかった。法要室で祭壇があって、お葬式できるようになってたんだけど、あったとしても年に 1 回か 2 回。法事があるとしても週末土日で、平日はほとんど人が来ない。たまに納骨堂にお墓参りに来る人がちょこちょこいる。でも、来て、お参りして、すぐに帰ってしまう。だから、この空間（お寺という空間）を有効に使ってるとは言えない状況だっ

た。もったいないなって思ったんだよね。

(Kさんの)理想としては、せっかくある本堂だとか法要室だとか厨房とか、普段ほとんど使われていない状態であるものを、もっとフルに有効に活用して、いろいろな人が出入りするような場所。常にいろいろな人がいて、賑やかな、心寄せられる場所。そういうのが最初の理想イメージかな。

お寺という施設が様々な人により活用され、賑わうこと。つまり「地域に開かれた場所」になることを理想としていた。このような目標を持ちつつも、住職としての仕事が忙しく、なかなかそこまで手が回らないという苦しみがあったという。そこで K さんが声をかけたのが、E-LINK である。

【2025 年 8 月 25 日 住職 K さんへのインタビューより】

元々、おちゃのまみたいなことをやりたいっていう願望はあった。それで、「こういう風にしたいと思ってるんだよね、なんか一緒にやらない？」っていうことを E-LINK の現代表に言ったら、「ぜひ一緒にやりましょう」と。で、お寺で居場所づくりをしようということになって、その代表的な立場として、S（おちゃのま責任者の S さん）と知り合って。S とゲストハウス（E-LINK の前活動拠点）にいたメンバー数人が中心になって始まったの。

以前より親交があり、子どもの居場所づくりを軸に活動していた E-LINK という存在は、K さんにとって絶好のパートナーであった。一方、E-LINK としても「地域の活動に携わっていきたい」という思いがあり、双方の目的と思いに共感し合うような形で 2021 年に「お寺での居場所づくり」の話が実現した。

2-1-2 現在の姿へ

現在おちゃのまは、毎回の参加人数が 30～50 名程度と大人数であり、年齢層も幅広い。そして、その人数の食事の調理と見守り役を賄えるだけのボランティアも存在し、円滑な運営ができています。しかし、最初からそうとはいかなかった。おちゃのま始動直後、序盤の参加者は E-LINK が運営していた学童保育に来ていた子ども達、中でも小学校高学年の子どもが主だったという。

【2025 年 8 月 11 日 おちゃのま責任者 S さんへのインタビューより】

始めの方はそもそも「やります」って言ってもあまり広まらないし、最初の参加者は（E-LINK の）学童の子たち。それまでもちょこちょこお寺で遊ばせてもらってたか

らね。その子達が友達呼んで、友達も来て…みたいな人の流れができたらいいいよねっという（構想はあった）。最初子供来たのはそこから（学童に来ていた子とそのお友達）かな。

E-LINK の学童保育との棲み分けはどうでしょうか、ってなった時に「ターゲットを小学校高学年にする」というのがあった。例えば児童館とか、小学校低学年はよくいるけど、留守番が1人でできるようになるぐらいの年（つまり高学年）から行かなくなるイメージがあるでしょ。それに加えて親が共働きしてたら家でも遊べない、公園も近所に少ないっていう中で、「高学年の子が遊ぶ場所無くない？」（ということに気が付いた。）そこから、「小学校高学年の居場所になれば」っていうところが、1番最初のおちやのまの目的みたいなものになった。

今でこそ多世代が交流する場となっているおちやのまだが、始動直後は限られた年齢層の子ども達やその兄弟が中心であった。Sさんとともにおちやのま立ち上げメンバーとして活動したMさんは、おちやのまの初期と現在の状況を比較してこう語った。

【2025年6月9日のフィールドノートより】

（寺子屋に来る人の）年齢層が広がって嬉しい。私たちが始めたころはボランティアも、運営側の人手も足りてなかったし。今のボランティアの皆には本当に感謝しているよ。

Kさんは、人手が足りなかった時期を振り返り、子どもにお手伝いをお願いするような場面もあった、と思い出を語ってくれた。

【2025年8月25日 住職Kさんへのインタビューより】

ボランティアの人がどれぐらい来てくれるかも、どのぐらいの人が食べに来てくれるかも全く読めない状態で始めた。ボランティアが3人とか4人来てくれる時もあるし、1人しか来ない、1人も来ないみたいな日もあって。そういう日は、子供も野菜剥きとか手伝ってくれたり、俺も一緒に料理する日もあった。当時はそこまで大人数は食べに来てなかったからできたことだと思うけどね。

大変な時期ではあるものの、笑顔で語るKさんの表情からは、当時もまた楽しく、やりがいのある時期であったことが伺える。

MさんやKさんが言及した「ボランティア」とは、主に筆者を含む大学生ボランティアやシニア世代のボランティアを指している。現在のように毎週安定して大学生ボランティアを獲得できるようになったきっかけは、2024年5月ごろに「ほっかいどう若者応援★プロ

プロジェクト」と繋がったことだという。「ほっかいどう若者応援★学生プロジェクト」とは、主に大学生が主体となり、子ども食堂が抱える課題解決を目指すプロジェクトである。学生は調理補助、学習支援、イベント企画等で札幌市内の子ども食堂をサポートしており、子ども食堂にとっては、学生たちの若い力が安定した運営の大きな支えとなっている¹。現在も4名ほどがこのプロジェクト経由でおちゃのまにボランティアに来ており、毎週の参加率も高いメンバーとなっている。また、シニア世代のボランティア獲得の契機となったのは、札幌市の広報の記事におちゃのまが掲載されたことだという。

【2025年8月25日 住職Kさんへのインタビューより】

お年寄りの元気なボランティアの方々が来てくれるようになったのは、札幌市の広報でこの地域食堂を取り上げて、記事にしてもらったのが大きなきっかけ。記事に「ボランティアの方募集してます」って書いたら、「ぜひお手伝いさせてください。」って来てくれて。広報に出たっていうのは大きかった。中には北海寺にお墓参りに来る人で、地域食堂に興味を持ってきて「今度私も来ていいかしら」って進んで来てくれる人もたまにいますよ。

このように、ボランティア獲得に向けた試行錯誤が続いた初期の時期には、おちゃのま側からの積極的なアプローチと自然発生的な関わりが並行して存在していた。一方では、ボランティアを安定的に確保するために、学生ボランティアを派遣する団体へ正式に支援を依頼し、活動に関心のある大学生を迎え入れる仕組みを整えた。これは、場に人が集まりにくい立ち上がりの段階において、場を持続させるために必要な制度的基盤を整える試みであった。しかし同時に、寺に元々お参りに通っていた地域の人が「何か手伝えることはあるか」と参加し始めるなど、日常的なつながりやご縁から生まれるボランティアの形もあった。こうした自発的な関わりは、いわゆる制度的な派遣とは異なり、おちゃのま自体の雰囲気や価値観に共感した人が自然に加わるものであり、おちゃのまの「ゆるやかに地域に開かれている」という特徴をよく表している。

このように、ボランティア確保の時期は単なる人手不足を補う段階ではなく、おちゃのまがどのような関わり方を歓迎し、どのような関係性を大切にする場であるのかが少しずつ形づくられていく過程でもあったと考えられる。制度的な支援と自然なつながりの双方を経て、現在のおちゃのまには多様な背景を持つ人々が無理なく関わる仕組みや空気感が育っている。

このようにしておちゃのまは、参加者・ボランティアともに大人から子供まで様々な世代が関わる、地域における「開かれた居場所」としての輪郭を形づくっていった。

¹ 北海道若者応援★学生プロジェクトホームページより

2-2 運営方針や理念

おちゃのまの運営方針や理念は、あらかじめ明文化されたルールや理念文によって定められたものではない。むしろ、実践を通してスタッフや参加者の間で共有され、少しずつ形づくられてきた「文化」や「空気感」として存在している点に特徴がある。

おちゃのまでは、子どもも大人も「お客さん」として扱われることはない。地域食堂の時間であっても、食事を提供する側と受け取る側が明確に分かれるのではなく、自分の食事は自分で盛り付け、使った食器を自分で下げるなど、「できることは自分で行う」という文化が共有されている。そこでは、誰かが指示を出したり、役割を割り振ったりする場面はほとんど見られない。参加者 1 人 1 人が、その場の状況を見ながら、自分にできることを判断し、自然に動くことが前提となっている。

このような「できる人が、できるときに、できることをする」という空気感は、責任の所在を曖昧にするものではなく、むしろ役割を固定化しないことで、参加者が主体的に場と関わる余地を残すための考え方である。役割を明確に定めすぎないことによって、子どもが「やらされる側」になることも、大人が「常に与える側」になることも避けられている。

このような役割は特定の誰かが一方的に押しつけたものではなく、活動の積み重ねの中で「これが心地よい」「この関わり方なら続けられる」という感覚として共有されてきた。そのため、おちゃのまの運営は制度的な支援の枠組みに依拠するのではなく、人と人との関係性の中で成り立つ柔軟さを持っている。

このように、おちゃのまの運営方針や理念は、「支援する／される」という関係を前提としないこと、役割を固定せず主体性を尊重すること、そして生活の延長として場を共有することに集約される。

これらの方針や理念は、おちゃのまの根幹として共有されているが、それがどのように日々の関わりとして現れているかについては、第 3 章で扱う「おちゃのまを支える人々」の姿からより具体的に見ていきたい。

2-3 おちゃのまの雰囲気

2-3-1 包容力のある空間としてのお寺-「拒まれていない」感覚-

おちゃのまについて理解を深めるにあたり、活動内容だけではなく実践の舞台となっている「お寺」という場の特性に目を向けることも重要である。居場所は人と人との関係によって形成される一方で、その関係を受け止める空間の性質によっても大きく影響を受ける。本節では、おちゃのまが行われている北海寺の雰囲気や空間的特徴に着目し、居場所づくり

を実践する舞台としての可能性を検討する。

おちゃのまの歴史からも明らかなように、北海寺は、おちゃのまの活動以前から現在にかけて地域に対して比較的開かれた存在であった。おちゃのまの開催日には、子どもやボランティアだけでなく、檀家や単に参拝に訪れた人など、活動とは直接関係のない人々も同じ空間に自然に居合わせている。この「誰でもいる」ような状況は、参加者にとって「ここに居てよいのか」と身構える必要のない、心理的に安全な環境を生み出している。

このように、特定の目的を持って参加する人だけで空間が占有されるのではなく、日常的な人の出入りがあることによって、場に溶け込みやすい雰囲気形成されている点は特徴的である。誰かが特別扱いされることも、逆に排除されることもないため、「拒まれている感じがしない」空間として機能しているといえる。

2-3-2 日常と非日常の混在

お寺という空間は、居場所としてのおちゃのまの実践を支える物的条件も満たしている。本堂や法要室、調理が可能なキッチン、子どもが遊べるスペースなど、活動に必要な機能が一通り揃っており、実践の継続性を支えている。さらに、畳や仏具、本堂など、普段目にしない道具類は、子どもたちの好奇心を刺激し、単なる公共施設とは異なる非日常性をもたらしている。

一方で、食事をする、話をする、遊ぶといった営みは極めて日常的であり、この日常性と非日常性の混在が、おちゃのまを「家でも学校でもない第三の居場所」として成立させていると捉えることができる。宗教施設でありながら、特定の信仰を前面に押し出さず、誰もが自然体で過ごせる点は、居場所づくりを実践する場としての可能性を広げている。

以上のように、おちゃのまが成立している背景には、人々の関係性や運営方針だけでなく、それを受け止める「お寺」という場の包容力と空間的特性が大きく関与しているといえる。北海寺の持つ開かれた雰囲気、必要な機能を備えた堅牢な施設、そして日常と非日常が交差する空間性は、居場所実践の土台として重要な役割を果たしている。

3 おちやのまを支える存在

3-1 運営者としてのSさんとKさん

3-1-1 おちやのま責任者のSさん - 「やりすぎない」運営 -

おちやのまは、限られた運営スタッフや特定の専門職に就く人々によって支えられているわけではない。E-LINKのスタッフ、大学生をはじめとするボランティア、地域の人々、偶然おちやのまに関わる人、そして子ども達など、様々な属性・立場の人が関わり合うことで成り立っている。本章では、こうした「おちやのまを支える存在」に着目し、それぞれの立ち位置や関係性を紹介する。まずはおちやのま運営の中核を担うSさんである。

おちやのまを支える存在の中でも、おちやのまの責任者であるSさんは、場の方向性や雰囲気をつくる中心的な役割を担っている。しかし、その関わり方は明確な指示や管理によって場を統率するようなものではなく、むしろ人々が自由に関われる余白を保ちながら、必要ときに働きかけるというスタイルを貫いている。

おちやのま運営においてSさんは、責任者として常に場に居続けながらも、全ての物事を自らが前面に立って担うことを意図的に避けている。その関わり方の根底には、「運営スタッフがなんでもかんでもやりすぎない」という意向がある。この姿勢についてSさんが語ってくれた際のエピソードを紹介したい。

【2025年5月19日のフィールドノートより】

雑談しているとSさんが声をかけてくれた。「会わせたい人がいるんだよね！」誰かを紹介してくださるようだ。キッチンから出て本堂手前にあるドアへ向かう。Sさんがドアを開けると、その向こうは小さな庭になっており、そこにはこじんまりしつとも立派な畑が見えた。最近お寺で始まった、「畑仕事」である。畑では、一人のお年寄りが作業をしているのが見えた。Cさん（80代・女性）である。「もう畝はあらかたできたから！」「何植えるの？種芋は消毒しなアカンよ！」はきはきした声でSさんに畑の状況をまくしたてる。Kさんは過去に自ら畑作業をやっていた経験があり、それを活かしてお寺の「畑仕事」の中核を担っているという。Sさんはこう語る。

「Cさんは畑の大将なんだよ。全部僕がやっていたら（リーダー役を担っていたら）つぶれちゃうから。おちやのまが回らなくなっちゃう。だから、おちやのまでするコンテンツだとか、年代ごとにリーダーが必要になってくると思うんだよね。」

この言葉は、単なる人手不足への対応を示すものではない。運営者がすべてを引き受けしてしまうことによって、他のボランティアや参加者が受け身になり、場が特定の人に依存して

しまうことへの危機感を表していると捉えられる。S さんにとって、運営とは「支えること」そのものではなく、「支えが分散していく状態をつくること」に近い。

この姿勢は、おちゃのまにおけるボランティアの行動や文化にも表れている。第 2 章でも触れたように、おちゃのまにはあらかじめ明文化されたルールや、特定の役割分担などは存在しない。それは、S さんがボランティアを含め、おちゃのまに関わる人々に対して細かいルールを課したり、役割を細かく割り振ることを意識的に避けていることによる。例えば新たなボランティアが来た際にも、「じゃあ、よろしくね」といった感じで送り出していることが多く、一見単なる放任主義のようにも見える。しかしその理由について、S さんは自身のボランティア観を踏まえて次のように述べている。

【2025 年 8 月 11 日 おちゃのま責任者 S さんへのインタビューより】

ボランティアっていうものについては、よく考える。「ボランティアに行きたいです」って言うとき、「お手伝いに行きます」みたいな感じがすごく強いけど、「お手伝いさん」としては見えていない。「自分でやりたいくて」ボランティアに来てるっていう側面もあるはずだからさ。だからこそ、役割を与えることもそんなにしない。

今来てくれている子達（大学生ボランティア）も、「あれして、これして」言っていないけど、洗い物だったりとか、子どもと遊ぶとか、勝手にやってくれるようになってきたし。最初の方の緊張した状態だとしても「何したらいいんだろう」っていう不安はあると思うけど、この場に慣れてきたら自然と、自分の役割みたいなものがなんとなく分かってくるというか。それまでは（慣れるまでは）「これやってね」って役割みたいなのを渡してもいいのかもしれないけど、それは「この場に慣れるために渡す」とか、そういう程度がいいかなと思ってる。「自分の好きに」やれないと、それこそ（ボランティアにとっての）自分の居場所にはならないだろうし。

この語りは、役割分担や指示によって人を動かすのではなく、おちゃのまでの活動への「慣れ」や人との関係性の中から自然と行動が立ち現れることを期待する S さんの運営観をよく表している。ここでは、ボランティアは役割を与えられた「お手伝いさん」として位置づけられているのではなく、場に身を置きながら徐々におちゃのまでの存在意義を見出していく「居場所を共に作り上げる一員」として捉えられている。ボランティアは活動当初、「何をすればよいのか分からない」という不安や戸惑いを経験する。しかし、その状態を経て場に慣れ、おちゃのまにいる他者との関係性が積み重なっていく中で、次第に自分なりの関わり方を見出していく。そこから生まれた行動は、誰かから指示されたものではなく、自ら選び取ったものであるため、行動に対する納得感や当事者意識、ひいては自主性に繋がりやすいと考えられる。役割やルールを決めすぎない運営は、無秩序を許容するためのものではなく、参加者が主体的に場と関わる余地を残すための実践なのだ。

さらに印象的なのは、おちゃのまそのものに対する S さんのスタンスである。S さんはおちゃのまを「無理に」残したいとは考えていないという。将来的におちゃのまの責任者を退き、引継ぐことになったらどうするか、ということを伺った際、S さんは次のように語った。

【2025 年 8 月 11 日 おちゃのま責任者 S さんへのインタビューより】

おちゃのまを任せられそうだなと思った人がいたら、全然任せてもいいかなと思ってる。あえて探すというよりは、そういう人が出てきたらっていう話だけれど。俺がいなくてもある程度続く部分は続くと思うし、（一方で）いなくなった時にそこにいる人たちがおちゃのまを求めているいなければならないんじゃないかな。だからおちゃのまを無理に残したいとも思わないし、誰か必要とする人がいれば残るだろうな、みたいな。

一見ドライな印象を受けるが、これはおちゃのまを自分たちの努力や使命感のみで維持しようとする事への距離の取り方であり、関わる人々の意思や流れに委ねる運営観を表している。S さんにとって、居場所は「守り続けるもの」ではなく、人との関わりの中で自然に続いたり、終わったりする存在なのである。

以上のように、S さんのおちゃのま運営は、「やりすぎない」つまり介入しすぎないことを選び続ける姿勢に一貫している。それは、場の秩序を放棄することでも、支援の責任を回避することでもない。むしろ、人々がおちゃのままで過ごす中で、自分なりの関わり方を見つけていく過程を尊重し、その余白を残したいという想い故の選択であるといえる。さらに、その過程の中で生まれた参加者の主体性や当事者意識は、運営における負担を分散させることにも繋がり、結果としておちゃのまの円滑な運営を支えていると考えられる。

3-1-2 北海寺住職の K さん-おおらかさが場を開く-

おちゃのまの運営を提案し、実践の場所としてお寺を提供する、北海寺住職の K さん。K さんは住職という立場にありながら、その権威性を前面に出すことなく、子どもや大学生、地域の大人たちと分け隔てなく会話し、自然にその場に溶け込んでいる。住職としての仕事が忙しい中でも、明るく気さくに話しかける様子は、立場の違いを感じさせず、誰もが自然体でお寺にいられる雰囲気をつくり出している。

おちゃのまの成立過程に関しては 2 章でも触れたが、K さんがおちゃのまに関わる背景の 1 つに住職としての使命感がある。活動へのモチベーションについて伺ったところ、K さん

は次のように語った。

【2025 年 8 月 25 日 住職 K さんへのインタビューより】

（おちやのまの運営は）個人の長谷川観樹としてやりたいっていうより、やっぱ北海寺の住職としてそういうことをしていきたいという想いがある。子供だけじゃなくて、どんな世代の方も気軽ににお寺に来て、お互いに協力し合って、助け合って過ごしていけるような、生きていけるような空間ができればいいなと。そういうことの方が、本来は我々（住職）の使命っていうか、住職としてのやるべきことだと思ってる。そういう体制・環境が作れたら、本当は1番いいのかなと。何かしらに困った人たちが、最後の砦として頼れるような場所ね。ゆくゆくはもう（おちやのまを）24時間オープンして、誰でもいつでも来ていいんだよっていう場所にできればいいな。

お寺は宗教的な施設であると同時に、いつでも・誰でも気軽に訪れることができるような、地域に開かれた場所であるべきだという考えのもと、子どもを中心に地域の人々を受け入れるおちやのまの活動に意義を見出している。そしてそれは「住職として」の自分がやらなければならないことだ、と強調した。理想の住職像を追い求めるような感覚があると考えられる。

さらに K さんは、活動の判断基準として「世の中のためになるかどうか」という利他的な視点を重視しており、その思いから、おちやのまの活動を自身の寺の中に留めるのではなく、他の寺院へと広げていこうとするとする熱意も見られる。

【2025 年 8 月 25 日 住職 K さんへのインタビューより】

お寺っていうのは、規模の大小はあるけど、施設的にはどこも立派なんだよね。本堂があるし、こういうお座敷があったり、こういう法要室があったり、厨房があったり。みんなそれなりのスペースはあると思うんだよね。だから、どのお寺にもこういうこと（おちやのまのような活動）をできる可能性があると思う。他のお寺でも、こういう活動をしていくことができれば、いい世の中になるんじゃないかな。実際に講師として、「皆さんのお寺でもできる可能性あるから、みんなでやってみませんか」という話を他県に住職向けにしたこともある。若いお坊さんたちはすごく興味を持ってくれて、「最初はどのような風にやっていけばいいんですか」みたいに熱心に聞いてくれた。

K さんにとっておちやのまとは、北海寺だけで完結する取り組みではなく、住職の務めとして、寺という空間が本来的に持つ可能性を他地域に向けて開いていく実践でもあるのだ。このような住職としての外への働きかけは、おちやのまでの実践を共有し、寺という空間が持つ可能性に気づく住職を増やしていくことで、各地に同様の取り組みが生まれうる条件

を整えていると捉えることができる。

また、住職という立場を通して築かれてきたKさんの幅広い人間関係は、おちゃのまを外部とつなぐ重要な資源となっている。他寺院との関係性や北海寺に関わっていた人々を呼び込む力など、Kさんが関与するコミュニティや知り合い経由での恩恵は大きい。地域の人々との繋がりや、新たな協力者を呼び込む契機となり、おちゃのまの運営を支えている。

このように住職としてのKさんは、単独の居場所を支える役割にとどまらず、居場所づくりの取り組みが面的に広がっていくための基盤を形成していると考えられる。場の内部に深く介入するというよりも、外部との接続点としておちゃのまを支える存在なのだ。

一方で、Kさんの関わりは住職としての使命感のみにより支えられているわけではない。Kさん自身が「子ども・若者が好き」であり、おちゃのまに訪れる人と関わることそのものを楽しんでいる点も、おちゃのまの雰囲気大きく影響している。

【2025年8月25日 住職Kさんへのインタビューより】

元々6人兄弟で弟もいたし、子供と一緒に遊んだり子供と接すること自体にあんまり抵抗がない。主任児童委員²っていうのを今やってて、その関係で月1回子育てサロンに行ってるんだけど、そこでもマブダチみたいな関係の2歳の友達ができたりして。小さい子と遊ぶのを俺自身が楽しめてるんだよね。

(大学生くらいの)若い子に関しても、一緒にいろんな話しながら飲んだり食べたり、俺自身が好きだから楽しいと思ってできてる感じはあるかな。

この語りから分かるように、おちゃのまという実践や、それに伴う人との関わりを「やらなければならないもの」として捉えるのではなく、自身にとっても「好き」な時間として心から楽しんでいるのだ。趣味に近い感覚とも捉えられ、だからこそKさんにとって無理がなく、長期的な関与を可能にしているのではないだろうか。そしてその姿は、おちゃのまを訪れる人々にとっても「歓迎されている」感覚や居心地のよさとして伝わっているように見受けられる。

以上のように、Kさんの関わり方は、住職としての使命感と、等身大の個人としての楽しさとが重なり合う点に特徴がある。前に出て場を管理するのではなく、寺という空間を開き、人と人との自然に関わる場を支え続ける。そしてその背景に「好きだから」続けられるという感情があることで、無理なく続けることを可能にしている。これら二つの側面が重なり合うことで、Kさんの実践は義務的な支援や制度的な活動に回収されず、おちゃのまに居心地のよさをもたらしている。

² 2022年就任

3-1-3 SさんとKさんのスタイル

本節では、おちゃのまの運営を支える存在として、責任者であるSさんと住職であるKさんの関わり方を整理してきた。両者は、役割や関与の仕方において異なっているが、共通しているのは、場を自分たちの管理下に置こうとしない姿勢である。

Sさんは、日常的な運営に深く関わりながらも、「やりすぎない」ことを意識的に選び続けることで、参加者が自ら場との関わり方を見つけていく余白を保っていた。役割を固定せず、各々が自分なりの関わり方を見つけていく過程を尊重することでボランティアなどの主体性を引き出し、活動に関する負担が特定の人に集中しない構造を生み出している。

住職であるKさんは、日常的には前に出すぎることなく人々を受け入れながら、寺という空間や住職という立場を社会に向けてひらく役割を担っていた。「世の中のためになるかどうか」という判断基準のもとで行われるKさんの実践は、おちゃのまを一つの活動にとどめるのではなく、他の寺院や地域へと参照可能な取り組みとして位置づけ直している。その一方で子どもや若者と関わることを自体を楽しみ、無理のない自然体の関わりを続けている点も、おちゃのまの雰囲気や継続性に大きく影響している。

このように、Sさんが内側から関係性を育てる実践を担い、Kさんが外側へ向けて場の可能性をひらく実践を担うことで、おちゃのまは管理されすぎることなく、かつ継続的に支えられる居場所として成り立っている。運営者が前面に立って支援を提供しようとするのではなく、関係性や場の条件を整えることによって支えるという在り方が明らかになった。

3-2 大学生ボランティア—大人と子供の「中間」—

3-2-1 「橋渡し」できる存在

3-2-1-1 世代間の橋渡し

本章では、大学生ボランティアの立ち位置や彼らの参加動機に着目し、彼らがどのように場の交流を促し、また自身にとっても学びや自己実現の機会となっているのかを検討する。

まず、大学生ボランティアの立場について検討する。おちゃのまを支える人々の中でも、筆者を含めた大学生ボランティアは独特な立ち位置を占めている。彼らは運営スタッフほど場の責任を負う存在ではなく、また子ども達やその親のようにおちゃのまを利用する立場でもない。その年齢や立場から、子どもと大人の「あいだ」に位置する存在として、おちゃのまにおける人々の関係性や雰囲気に影響を与えている。S

さんは、おちやのまにおける大学生ボランティアの重要性として、その属性ゆえの「立場」を挙げている。

【2025 年 8 月 11 日 おちやのま責任者 S さんへのインタビューより】

どっちの世代からも（子ども世代と、シニア世代を含めた大人世代）分かりやすい、親しみやすい人というか。そういう意味で、大学生はとても必要な存在だと思う。C さんみたいに、自分から積極的に話しにいく人であれば、特に年齢に関係なくどんどん人と繋がっていくよね。でもそういう能力（対人能力）がなくても自然と様々な年代の人と繋がれるようになるのが大学生なんだよね。

S さんの語りからは、大学生ボランティアが特別な対人能力を持つ存在であるというよりも、年齢や立場そのものを関係をつなぐ契機と捉えていることが読み取れる。積極的に人と関わろうとする性格でなくとも、大学生であるという属性自体が、多様な世代との接点を生み出しているのである。

多世代交流の重要性はしばしば指摘されるものの、実際に交流してみよう、会話してみようとなると、共通の話題が見つからない、接し方が分からないという理由から、うまく成立しない場合も多い。その壁は年齢差が大きくなるほど乗り越えるのが難しくなる。しかし、大学生は大人（お年寄り）の年代の流行りや文化に一定の親和性があるって会話の糸口が見つかったり（「大学生が昭和曲を知っているような感じ」と S さんは表現した）、一方でおちやのまにいる人の中で一番子供世代に近い存在でもあるため、子どもからも話しかけやすい。このように、大学生ボランティアは世代間の会話や関わり「橋渡し役」として機能していると考えられる。

実際のおちやのまの活動においても、大学生ボランティアの中間的な立ち位置が確認できるエピソードがある。

【2025 年 9 月 1 日のフィールドノートより】

法要室に行くと、おちやのま初参加だというご家族が机を囲んで世間話をしていた。ご家族のお母さんが、趣味で作ったらしいタイル作品の写真を見せていた。絵画療法にも造詣があるおじいさんと作品を見せ合い、話がはずんでいた。本堂で遊んでいた小学生数人が、作品に興味を持ったのかチラチラ覗いているのが見えた。見知らぬ人に人見知りしているのだろうか、なかなか近づいてこない。そこでボランティアの D（大学生、女性）が「こっちおいで、見てごらん！」と声をかける。小学生は安心したように作品に近づき、賑やかに鑑賞し始めた。

このエピソードからは、大学生ボランティアが、異なる世代や立場の人々を直接つなぐのではなく、安心して関わり合うことができるような「きっかけ」を提供する存在として機能していることが分かる。子どもたちは、見知らぬ大人同士の会話に自ら踏み出すことは難しいが、親しい大学生ボランティアの声かけを通じて、自然にその輪の中へと入っていくことが可能となっていた。つまり、心理的な距離を縮める役割を果たしているのである。大学生という立場は、子どもにとっては親しみやすく、大人にとっては過度な構えを必要としない存在であり、その中間性が、世代を超えた関わりへの入口として機能しているといえる。

3-2-1-2 初参加者を巻き込む力

大学生ボランティアが持つ「橋渡し」の力は、世代間のコミュニケーションを円滑にする場面でのみ発揮されるものではない。観察を通して、初めておちやのまに参加したボランティアが、おちやのまという空間に馴染む際にも欠かせない力であることが分かった。

第3章でも言及したように、おちやのまでは、新たに参加したボランティアに向けて形式ばった説明をしたり、役割を振ったりということはあまりされない。それゆえに初参加のボランティアが場の雰囲気や子どもとの関わり方に戸惑う場面も見られる。具体的なエピソードをもとにご紹介する。

【2025年8月25日のフィールドノートより】

お寺に行くと、初めて見る女の子が一人。高校3年生の、若者応援プロジェクト経由のボランティアらしい。なにをすればいいのか分からず困っている様子だったが、大学生ボランティアのDが「一緒に小学生と鬼ごっこしよう」と誘い、巻き込んだ。小学生相手の鬼ごっこは体力消費が激しいので、体力的に大丈夫だろうか、と心配もしたが、楽しそうにしていたので一安心。

このエピソードのように、初参加で戸惑いを見せるボランティアには、継続的に参加している大学生ボランティアが共に行動することで、場への関わり方を体感的に理解する過程が生まれている。このような関わりにおいて大学生ボランティアという存在は、初参加のボランティアと既存のボランティアを直接つなぐというよりも、初参加者が「おちやのま」という場そのものに馴染むための媒介として機能していると捉えられる。大学生ボランティアは、場の文化や雰囲気を言語化して形式的に伝えるのではなく、遊びなどの実践を通して体感的に共有する存在であり、そのことが初参加者の不安を和らげ、心理的ハードルを下げている。大学生ボランティアは、おちやのまへの参入を支える「入口」としての役割も担っているのである。

3-3 常連の大人たち—そこにいるということ—

3-3-1 経験を活かすシニア世代

おちやのまには、毎回必ず顔を見せる親や、毎回訪れるわけではないものの、長い間関わってきたシニア世代のボランティアなど、継続的に関わり続けている「常連の大人たち」が存在する。彼らは運営スタッフのように特定の責任や役割を引き受ける存在ではなく、その行動や関わりは目立つものではないが、定期的に顔を合わせることで、おちやのまの日常と安心感を確かに支えている。本節では、こうした常連の大人たちの関わり方に着目し、経験を活かすシニア世代や子どもたちの親といった例を通して、おちやのまにおける「見守り」や「共に過ごす」関与のあり方を探る。

まずはシニア世代の方々である。おちやのまでは若者ばかりではなく、70～80代のお年寄りの方々も活躍している。彼らの関わり方もまた、一様ではない。参与観察を通して、大きく分けて2つの関わり方が見えてきた。1つは、ボランティアとして積極的に調理や洗い物をこなすなど、パワフルに作業や準備を担う人々である。2つは、積極的に前に出ることには少ないものの、静かに子ども達の様子を見守りながらときに言葉を交わす人々である。

前者のようなシニア世代は、第3章でご紹介した「畑仕事」を元気にこなすCさん（80代・女性）のように、これまでの生活や職業経験を活かし、調理や畑作業といった活動に力を貸している。食事の準備や片付け、畑の手入れなどは、おちやのまの活動を支える上で欠かせないが、こうした作業は特定の役割として固定されているわけではない。シニア世代の大人たちは、「できるから」「慣れているから」といった理由で自然に手を出しており、その関わりは状況に応じた柔軟なものとなっている。Cさんのエピソードを例としてご紹介したい。

【2025年5月19日のフィールドノートより】

Cさんがやってきて、編み物をしないかと誘われる。長机を見ると、ある親子（母親と男の子）がCさんに編み物を教わっているところだったようだ。編み物の知識がゼロの筆者は、Cさんに一番簡単な編み方を教えてもらおう。Cさんは畑仕事だけでなく編み物も大得意。趣味らしく、教え方もすごく上手である。男の子は編み物のセンスがあったようで、Cさんも笑顔で太鼓判を押している。男の子は褒められて嬉しいのか、はにかみつつもくもくと針を動かしている。

このように、趣味や特技などの「好きなこと」を活かして子ども達の遊びの幅を広げるようなやりとりも頻繁に見受けられる。上記のエピソードのCさんのように、子どもや大学生に何かを教えたり、話したりしているときのシニア世代の表情は非常に生き生きとしてお

り、やりがいや充足感を感じていると考えられる。さらに、遊びや作業を通じて子どもや親、大学生と会話を交わす場面が増え、世代間交流の契機となっている。

一方で、後者の、積極的に作業を担うわけではなく、子どもたちの様子を静かに見守るシニア世代の姿も見られる。彼らは、子ども達と一緒に遊んだり、話したりするというよりは、静かに椅子に座って子ども達が自由に過ごす様子を見守っていることが多い。直接的な関わりが無くとも、見ていだけで癒されたり、楽しめたりするのだろう。その存在は目立つものではないが、「いつもの大人がいる」という感覚をおちやのまにもたらし、子どもや他の参加者に安心感を与えているように見受けられた。このような人々は、各々のタイミングでたまに話しかけたり、特技を披露することもある。

【2025 年 5 月 19 日のフィールドノートより】

法要室には、いつものおじいさんがいた。このおじいさんはいつも静かに座っているタイプだが、今日は何やら特技を見せてくれるようだ。この人はどうやらマッサージ師らしく、ボランティアの A がやってもらうというので初めて見学させてもらうことに。おじいさんのマッサージは一風変わっていて、「石」を使うという。3 種類の石をカバンから取り出し、一番大きいのを A の背中に押し当てる。ツボがあるらしい。いつからマッサージをやっているのか聞くと、「もう 49 年くらいやってるんだよ」と。「絵画療法とも相性がよくてね。その絵（カバンの中の、不思議な模様のカラフルな絵）をお腹に充てると、じんわりあったかくなるんだよ。昔はアメリカにも（仕事）仲間がいてね。今は離れ離れになっちゃったけど…」と過去のお仕事について教えてくれた。施術が終わった A に感想を聞いてみると、「肩が軽い！違い結構分かりますよ」と興奮気味だ。

いつも静かに座っていたおじいさんがテキパキとマッサージする姿を見て、少し驚いたのを覚えている。このように、気まぐれや、誰かからのリクエストに応えるかたちで意外な一面を見せることもあるのだ。

以上の二つの関わり方に共通しているのは、何かを「教える・教えられる」という相互の交流を通じて、シニア世代が生き甲斐や社会とのつながりを実感する機会になっているという点である。例えば、地域食堂で使用する鶏肉の下ごしらえをしていた場面で、C さんはこう語っていた。

【2025 年 5 月 19 日のフィールドノートより】

「（料理を作るのが）自分の分だけだといろいろ適当になりますからねえ。やっぱり誰かのためじゃないとね（作り甲斐がない）」

Cさんは現在1人暮らしだそうです、自分のためだけに料理を作る、というのはやりがいがあるらしく、「みんなのために」料理の腕を振るう機会は特別楽しいものだと考えているようだった。このように、おちやのまの活動に無理なく、むしろ楽しみながら参加し、子どもや親、他の大人たちと交流する中で、自身の経験が誰かの役に立っていることや、場の一部として受け入れられている感覚が育まれ、それが1つの生き甲斐のようになっているのである。この意味で、おちやのまとシニア世代は互いに支え・支えられる関係とも捉えることができる。

3-3-2 親達の過ごし方と見守りを「委ねる」ということ

常連の大人たちの中には、子どもたちの親としておちやのまに関わる人々も含まれている。おちやのまに子どもを預け、仕事が終わる次第迎えに来る、というスタイルの親もいるが、この項で触れるのはあくまで子どもと共におちやのままで過ごす親に限定している。親たちは、自身の子どものおちやのままで遊ぶ様子を見守ったり、食事の補助や泣いている子をなだめる、などのお世話をしたりしながらその場に居合わせているが、その関わり方はもちろん一様ではなく、状況に応じて柔軟に変化している。

【2025年6月30日のフィールドノートより】

18:30頃、だんだん子ども達がお飯を食べ終わってきた。食事中の法要室の外の廊下で、ブランケットにくるまれた赤ちゃんを小学生2、3人と大学生ボランティアがあやしている。この赤ちゃんのお母さんは、ママ友と集まって法要室でゆっくり談笑中である。ボランティアや顔見知りの子どもの達など、赤ちゃんを見る目がたくさんあるので、気を緩めることができるのだろう。小学生たちは「かわいい」と連呼しながらなでたり、動きを観察している。すると、赤ちゃんがぐずりだしてしまった。どうしていいかわからず焦っていると、お母さんがすぐに駆けつけてくれた。お母さんが抱っこすると途端に泣き止む赤ちゃん。どうやらおもしろさが気持ち悪かったようで、目の前で素早くおむつを替え始めた。手際の良さに「早いですね…！」と私が驚くと、「3人目ですから！」と笑って答えてくれた。お母さんは赤ちゃんのプロである。「この子、抱っこが好きなんですよ」と言いつつ、お母さんが抱っこの仕方を教えてくれた。

このエピソードでは、お母さんは一時的に我が子から目を離し、信頼できる顔見知りの子供やボランティアに面倒を見てもらっている。このように、親達は子どもの安全や様子に目を配る一方で、常に子どもの側に付き添っているわけではないのである。子どもたちが大学生ボランティアや他の大人と遊んでいる間など、親たちは少し距離を取り、他の親や常連の

大人と世間話をしたり、近況を語り合ったりし、親同士でおちゃのまでの交流を楽しんでいる姿が多く見られる。この「任せて離れる」関わり方が成り立っている背景には、親たちが継続的におちゃのまに参加し、大学生ボランティアや他の子どもたちと顔見知りの関係を築いてきたことがあると考えられる。繰り返し顔を合わせ、日常的なやり取りを重ねる中で、信頼感が徐々に形成されていく。そのため、親たちは場の様子を理解したうえで、「おちゃのまにいる顔見知りの中の誰かしらの目が届く範囲に子どもがいる」という安心感のもと、安心して子どもの見守りを他者に委ねることができているのだ。

このように、親たちは子どもの見守りを一手に引き受ける存在というわけではなく、場の中で見守りを「分かち合う」一員として関わっている。子どもを通じておちゃのまに参加しながらも、親自身も一人の大人として交流を楽しむことができる点は、おちゃのまが親にとっても居心地のよい居場所となっていることを示している。親の過ごし方は、継続的な関係性の中で「委ねる」ことが可能となる居場所の特徴を示している。

3-3-3 常連の大人達が支える日常のような空気感

以上のように、おちゃのまにおける常連の大人たちは、明確な役割や責任を担う存在ではないものの、継続的に場に関わることで、その日常と安心感を醸成している。シニア世代の大人たちは、これまでの経験や知識を背景に、調理や畑作業、遊びをはじめとする活動に無理のない形で参加し、また静かに子どもたちを見守ることで、場に落ち着いた空気をもたらしている。こうした関わり合いは、彼ら自身にとっても人とのつながりを感じられる時間となり、生き甲斐や居場所意識につながっていると考えられる。

また、子どもたちの親は、継続的におちゃのまに訪れる中でボランティアや他の子どもたちと顔見知りになり、場に対する理解と信頼感を深めている。その結果、親たちは子どもの様子に目を配りながらも、ときに見守りを他者に委ね、自身も一人の大人として交流を楽しむことが可能となっている。このような関わり方は、時間をかけておちゃのまに蓄積された関係値があるからこそ成立している。

こうした常連の大人達は、「何かをすること」以上に、「そこに居続けること」によって場の安定感を生み出している。継続的に顔を合わせる大人がいることで、おちゃのまは、見知らぬ人との出会いや、特別なイベントによる刺激ばかりではなく、日常の延長に近い空気感も持ち合わせるようになったと考えられる。常連の大人たちは、前面に立たない関わりを通じて、おちゃのまの安心感と持続性を静かに支えている存在なのである。

3-4 一期一会の出会い―新しい風―

3-4-1 「連れてくる」文化

おちゃのまには、運営者や大学生ボランティア、常連の大人たちとは異なり、結果として継続的な繋がりを持たなかった人々も数多く訪れている。北海道外に住んでいた、仕事が多忙であったり、再訪が叶わなかった理由は様々であるが、一度きりの登場にも関わらず、彼らがおちゃのまにもたらす影響は大きい。偶然の繋がりによって一時的に場に関わる彼らの存在は、おちゃのまの開かれた性質を象徴している。本節では、こうした「一期一会の人々」に着目し、彼らの関わりがどのようにおちゃのまを支えているのかを整理する。

まずはおちゃのま独特の「連れてくる」文化である。おちゃのまでは、ボランティアや運営スタッフ、親などが友人知人を気軽に連れてくる光景が頻繁に見られる。いくつかエピソードをご紹介します。

【2025 年 9 月 1 日のフィールドノートより】

大学生ボランティアの I（大学生、男性）もやってきた。今日は友達を連れてきたようだ。名前は G（大学生、男性）という。将来の進路や自分の経験について悩んでいたところ、「一度来てみないか」と I に声をかけられ、おちゃのまのボランティアに参加してみる運びとなったらしい。さっそく子ども 2 人も交えて、5 人でババ抜き開始。G は子供への接し方が上手で、初めての参加とは思えないスピードで仲良くなっていく。ババ抜きが終わると、もうトランプも飽きてしまったようなので、皆で本堂に移動し、鬼ごっこをすることになった。

【2025 年 6 月 30 日のフィールドノートより】

今日は外国人の方がいた。S さんの知り合いらしい。アルゼンチン出身のようで、ホワイトボードに地図を描いて S さんが国の位置を説明している。普段なかなか会えない外国人を相手に、子ども達はどうかおしゃべりがしたいようだが言語の壁もあり少し緊張気味。そこで S さんの知り合いの日本人男性が間に入り、通訳しながら話の手助けをするなどして子ども達とコミュニケーションをとり始めた。

このように、特定の運営スタッフなどが積極的に勧誘しているわけではなく、「今日は友だちを連れてきた」「知り合いが来たいって言っていて」といった気軽さで、いろいろな人伝に新しい人が場に加わってくる。連れてこられる人の属性はさまざまであり、子どもから大人まで幅広い年代、また国籍や背景も多様である。こうした出会いは、特に子ども達にとって、普段の生活圏では関わる機会の少ない人々と出会うきっかけとなっている。

観察を通して印象的であったのは、一期一会の大人たちが何か特別な準備や説明などを事前に受けることなく、自然に場に受け入れられている様子である。この様子には、おちゃのまにおいて役割やルールがあらかじめ厳密に定められていないという特徴の良い側面が表れていると考えられる。これまで見てきたように、おちゃのまでは、運営者、大学生ボランティア、子どもといった立場の間に明確な境界線が引かれておらず、「何者であるか」よりも「その場にどう関わるか」が重視されている。こうした役割の曖昧さは、場の内側にいる人々にとっては主体的な関わりを可能にする一方で、初めて訪れる人にとっては、「何を求められているのか分からない不安」を和らげる働きをしているのではないだろうか。その結果、一期一会の大人たちは、自らを「支援する側」や「参加者」として意識することなく、自分が自然でいられる距離感を選択しておちゃのまに居ることができている。そして、子どもと遊ぶ人や大人だけで仕事の話をする人など、様々な関わり方が生まれるのだ。このような受け入れのあり方は、役割を明確に設定しない運営が、継続的な担い手だけでなく、偶然訪れる人々にとっても居心地のよい居場所を生み出していることを示している。

3-4-2 ご近所さんによる支え

一期一会の大人たちの中には、特定の誰かの知り合いというわけではないが、近所に住んでいるから、という理由で気にかけてくれる人々の姿も見られる。まずはエピソードを紹介したい。

【2025年5月19日のフィールドノートより】

17:00 ごろ。突然1人の男性（70代）が山菜をたくさん持ってきてくれた。近所に住んでいるようだが、Sさんも面識はなく、完全に初対面の人のようだ。すぐに帰ってしまい詳しいお話は聞けなかった。「お名前聞いておけばよかった」と悔しがるSさん。近所の人差し入れをしてくれるという場面は、ありがたいことによくあることらしい。その山菜は、さっそく来週の地域食堂で使わせていただこう、ということになった。

このように、おちゃのまの活動時間中にふらりと立ち寄ったり、食材やおかずのおすそ分けを持って訪れたりする近所の人々は、明確な役割やおちゃのまへの深い関わりを伴うことはない。そのため、「支援している」という意識が前面に出ることは少なく、むしろ「困っていたら気になる」「余っているから持ってきた」というような日常の延長としての自然な共助の一環として行われている。この点には、お寺という場所が持つ特性も影響していると考えられる。寺はもともと地域に開かれた場であり、人が立ち寄りやすい雰囲気を備えている。その空気感が、近所の人々の気軽な訪問を可能にしているのではないだろうか。

近所の人々によるこうした関わりちょっとした気遣いは、おちゃのまに地域のあたたかさを滲ませると同時に、おちゃのまが地域の日常の一部として存在していることを示している。たとえ一期一会であっても、その一度の関与が場の雰囲気や和らげ、参加者に安心感や温かみを与えている点で、重要な支えとなっている。

3-4-3 「支える」とは言わない支えのかたち

本節では、結果としておちゃのまと継続的な繋がりを持たず、一度きりの関わりとなった人々に着目し、その関わりが場に与える影響を整理してきた。このような人々の存在は、おちゃのまにおいて様々な属性の人々と関わる機会を創出している。友人や知人を「連れてくる」文化や、近所の人々がふらりと立ち寄る関わりを通して、年齢、職業、国籍などを越えた出会いが、特別なイベントや仕掛けを伴うことなく日常的に生じている。このような偶然的な出会いは、参加者にとって普段の生活では得がたい他者との接点となっていた。こうした関わり方が自然に成立している背景には、おちゃのまにおける役割や立場の曖昧さがあると考えられる。誰が運営者で、誰が参加者であるかが厳密に区分されていないため、初めて訪れた人であっても、特定の役割を引き受けることなく場に居ることが可能となっている。この曖昧さは、おちゃのままで他者と関わる際の心理的なハードルを下げ、多様な人々が各々のやり方で関わることを可能にしている。

また、近所の人々によるおすそ分けに見られるように、一期一会の関わりの中には、ご近所としての生活感覚に根ざした働きかけも見られる。これらは「支援」や「活動」として強く意識されているものではなく、地域の日常の延長として何気なく生まれているものである。こうした関わりを通して、おちゃのまは単なる活動の場ではなく、地域のあたたかさが感じられる空間としても立ち現れている。

このように、一期一会の人々たちは、継続的な担い手ではないものの、多様な属性との出会いをもたらし、おちゃのまという場が開かれた状態を保つために必要不可欠な存在である。役割やルールの曖昧さと地域に根ざした関わりが重なり合うことで、おちゃのまは偶然の出会いを受け止める包容力のある居場所として機能しているのだ。

4 おちやのまを「共につくる」存在としての子ども達

4-1 子どもは「お客さん」ではない

おちやのまの日常に目を向けると、子どもたちは必ずしも受け身の存在として関わっているわけではない。むしろ、日常的な行為や他者との関わりを通して、おちやのまという場を作り上げる一員として主体的に振る舞っている姿が見られる。こうした姿は、「支援の対象としての子ども」という一般的なイメージとはやや異なる。

本章では、おちやのまにおける子ども達の位置づけに着目し、子ども達が「支援される存在」や「利用者」としてではなく、おちやのまを共に作る存在としてどのように関わっているのかを明らかにする。そして、子どもたちの主体性や、「支援する／支援される」という関係を超えた居場所のあり方について検討する。

おちやのまにおける子どもたちは、地域食堂の利用者として食事を提供されるだけの「お客さん」として扱われているわけではない。第2章でも触れたように、食事の場面では、子ども達は大人と同様に、自分の食器を運んだり、洗い物や片付けを手伝ったりする姿が当たり前の光景となっている。この背景にはおちやのまの「できることは自分でやる」という文化があり、食事の時間そのものが「提供される時間」ではなく、「共につくり、共に過ごす時間」として位置づけられている。このような関わり方を通して、子どもたちは場の一部としてある種の責任を負っている。

さらに観察を通して印象的であったのは、子どもたちが指示されることなく、自ら考え、主体的に行動する場面が多く見られる点である。1つエピソードを紹介したい。

【2025年6月9日のフィールドノートより】

法要室では、小学校高学年の女の子が折り紙とマーカーを使って「読み聞かせカードのお知らせ」のポップを作っていた。「読み聞かせカード」とは、QRコードを読み取ることでアイパッドなどに読んだ本を登録できるものである。このカードの存在を知らせるためのポップを、誰かに頼まれたわけでもなく自主的に作っているという。白い折り紙に赤いマーカーで文字と絵を書き、完成。その出来栄を見たSさんは感心し、「すごい、ありがとう！」と女の子をほめていた。

これは、子どもが誰かに指示されることなく、自ら必要だと感じた仕事を見つけ、実行したエピソードである。この他にも、小学校高学年を中心に、お母さんの手が離せないときに赤ちゃんをあやしたり、遊びの場で進んで年下の面倒を見るなど、できることを自分で見つけて行動している。これらのエピソードからは、子ども達と運営スタッフとの関係性が決して「やらせる・やらされる」ものではなく、「一緒に」場をつくる関係として成立している

ことが読み取れる。子どもの行為は役割として課されたものではないが、おちゃのまにとって意味のある行動として受け止められており、おちゃのまの一員としての意識やささやかな責任感を育むきっかけとなっていると捉えられる。

以上のように、おちゃのまの子ども達は、単なる「お客さん」や「支援される存在」ではなく、場を共に支え、共につくる存在として認識されている。「自由に過ごすことができる」という点もおちゃのまの魅力の1つではあるが、その点のみを重視するのではなく、「一緒にやる」関係性の中で一定の責任感が育まれている点に、おちゃのまにおける子どもの関わり方の特徴が見出される。

4-2 「支援する・支援される」構図からの脱却

4-1 で検討した「一緒にやる」関係性や、子どもに対して過度に干渉しない空気は、偶然生まれたものではない。その背景には、責任者である S さんの一貫した思想がある。S さんは、子どもたちに「困っている人」や「貧しい人」といったラベル付けをすることに慎重であり、そうした言葉によって関係性が固定化されることを避けたいと考えている。

【2025 年 8 月 11 日 おちゃのま責任者 S さんへのインタビューより】

例えば子ども食堂として、いわゆる「貧しい子」に対して支援をします！みたいなスタンスを取ると、その結果来てくれた子達を「そういう（貧しい）子」として見てしまおうと思うんだよね。そして来る側は「自分が貧しいということ」を自覚せずにはいられない。その時点で、どこかお店のお客さんと店員さんみたいな関係になっちゃう感覚がある。それって本当の繋がりとは言えないよね。サービスを提供する・される関係性でしかない。

この語りからは、支援することそのものへの否定というよりも、「支援する・される」という関係性が前面に出ることによって人と人との関係が歪められてしまうことへの懸念が読み取れる。S さんにとって重要なのは、子どもを福祉の対象として一方的に位置づけることなく、同じ場を共有する一人の存在として関わることなのだろう。「支援する側」と「支援される側」という構図が前提となると、そこには上下関係や役割の固定化が生じやすくなる。S さんは、そうした構図のもとでは「本当の繋がり」は生まれにくいと捉えている。

では、「支援する・される」という関係性が極力生まれないようにするための工夫として何が挙げられるのだろうか。観察を通して見えてきたのは、「地域食堂」と子どもの居場所としての「おちゃのま」を同時並行で開催する運営形態の利点である。

例えば、地域食堂のみを単独で実施する場合、食事を「提供する側」と「受け取る側」という関係が強調されやすい。一方、おちゃのまでは、食事の時間と日常的な居場所としての

時間が区切られることなく緩やかに連続している。そのため、食事を媒介とした関係が、支援の場として切り離されることなく、「共に過ごす日常」の一部として位置づけられているように見受けられる。実際の場面においても、子どもたちは食事を受け取るだけの存在ではなく、片付けや準備に関わり、大人やボランティアと同じように場の一部として振る舞っている。また、親や学生ボランティアのような大人たちも「支援者」として振る舞うのではなく、食事を共にし、会話を交わし、時には子どもと一緒に遊ぶなど、同じ時間を共有する存在として関わっている。このような関係性の中では、「助ける」「支援する」といった上下関係が前面に出ることは少なくなるのではないだろうか。

この点において、おちゃのまでの活動は、「支援」という言葉で表される一方向的なものではなく、「共創」として捉えることができる。子ども、大人、学生ボランティア、運営者が「一緒に過ごす」「共に動く」中で、できることを分かち合い、役割を固定せずに場を形づくっている。おちゃのまは、支援を提供する場というよりも、関わる人々が日常を共有しながら場を共に作り続ける実践の場であるといえる。

4-3 支援ではなく「共創」へ

本章では、おちゃのまにおける子どもたちの関わり方に着目し、子どもが「支援される存在」や「お客さん」としてではなく、おちゃのまを共に支え、共につくる存在として位置づけられていることを明らかにした。地域食堂や日常の場面において、子どもたちは自由に過ごすことを許されながらも、「一緒にやる」関係性の中で自然に場へ関与しており、その関わりは主体性とささやかな責任感を伴うものであった。

こうした関係性の背景には、子どもを「福祉の対象」として固定化することを避け、同じ場を共有する一人の存在として関わろうとする S さんの姿勢があった。それを実現させるための工夫として、地域食堂とおちゃのまが同時並行で開催されている構造に着目した。この構造は食事の提供を「支援」として切り離すのではなく、日常の延長として位置づける効果を持ち、「支援する／支援される」という二分的な関係が前面化しにくい関係性を支えていると考えられる。

このように、おちゃのまは、支援を提供する場というよりも、人々が日常を共有しながら「共に過ごす」「共に動く」関係性の中で役割を分かち合い、場を共創していく居場所であると捉えることができる。

5 おちゃのままでの「役割」

5-1 役割を固定しないという選択

これまでの章では、おちゃのまを支える人々や子どもたちの関わり方に着目し、場における関係性の特徴を描いてきた。本章では、そうした関係性がどのような運営上の工夫や構造によって支えられているのかを、「役割」のあり方から整理する。

おちゃのまでは、役割を細かく固定せず、人々が状況に応じて動くことが前提とされている。本章では、明確な役割と曖昧な役割が併存する構造と、「好きにやっていいよ」といった言葉が果たす機能に注目し、役割を固定しない運営がどのように成立しているのかを検討する。

おちゃのまの特徴として、主体性や自由な関わりが許される空気感などがあるが、それらは個人の性格や偶然によって生まれているわけではない。そこで役割を固定しすぎない運営のあり方に着目し、人々の主体的な関与や継続的な参加をどのように可能にしているのかを整理する。

おちゃのまでは、すべての役割が曖昧にされているわけではない。経理や調理など、継続的な運営に不可欠な役割については、あらかじめ担い手が定められている。一方で、食事の配膳や片付け、子どもとの関わり、場の見守りといった日常的な役割については、あえて細かく割り当てられていない。このように、明確な役割と曖昧な役割が併存している点に、おちゃのまの運営上の特徴がある。

この役割のあり方は、参加者が場の状況に応じて自ら動くことを前提とした運営の根幹になっている。運営スタッフがおちゃのまにおけるコンテンツのすべてを担うのではなく、「やりすぎない」姿勢を保つことで、参加者が自分にできることや、今その場で必要とされていることを考える余地が生まれている。その結果として、おちゃのまには「できる人が、できることをやる」という空気感が形成されている。

このような役割のあり方は、おちゃのまに関わるさまざまな人々の間で共有されているが、とりわけ大学生ボランティアの間においてその特徴が顕著に見られる。大学生ボランティアの間では、誰かから指示を受けなくとも、互いの動きや各部屋の様子を見ながらその都度役割分担や相互補完が行われている。このような役割を固定しすぎない運営が成り立たせているのが、大学生ボランティア同士の「声掛け・対話」である。例として、具体的なエピソードを紹介する。

【2025 年 7 月 14 日のフィールドノートより】

ご飯後、ボランティアの R（大学生・男性）に声を掛けられる。「本堂の方、今人いない（本堂で遊んでいる子どもを見守る人がいない）みたいなのでお願いしてもいいで

すか？」とのこと。もちろん了承し、本堂に向かう。大学生ボランティアメンバーは視野が広い人が多い。全体を見渡しつつ、人が足りていない部分はないかと常に気を配っている。

このように、おちやのま開催中には、「あの部屋は人が少ないかもしれない」「少し手が足りていないかもしれない」といったボランティア同士の声かけが随時行われており、状況に応じて人の動きが調整されている。役割が事前に厳密に定められていないからこそ、参加者同士が場の状況を言葉にし、共有する必要が生じているが、状況に応じて柔軟に役割を転身することができるのは利点の一つである。

また、おちやのま終了後には、SNS に掲載する活動報告レポートを作成する時間があるのだが、その中でボランティア達はその日の出来事を振り返り、印象に残った場面や気づきを共有している。この振り返りは、単なる報告ではなく、次回以降どのように動けばよいのかといった関わり方を考え直し、次回に活かす場として機能している。

このように、おちやのまにおける役割の曖昧さは、無秩序や放任を意味するものではない。むしろ、対話や振り返りを通じて状況を共有し続けることによって、その都度役割を編み直すことを可能にし、柔軟な運営を実現している。役割を固定しないという運営の在り方は、参加者の自主性とコミュニケーションを前提とするため、連携の難しさや負担を伴う側面も持っている。それでもおちやのまがこのあり方を維持しているのは、役割を通して人を管理するのではなく、人と人との関係の中で場が立ち上がっていくことを大切にしているからであると考えられる。

5-2 「好きにやっていいよ」という言葉

おちやのまにおいて、住職の K さんや責任者である S さんは、主にボランティアに向けて「好きにやっていいよ」「やりたいことをやっていい」という言葉を繰り返し投げかける。この言葉は、一見すると行動を個人に委ねる放任的な姿勢のようにも受け取られうる。しかし実際には、参加者が場に関わる際の心理的なハードルを下げ、活動への参入を促すためのメッセージとして機能している。

繰り返しになるが、おちやのまでは、参加者に対してあらかじめ明確な役割が割り当てられることは少ない。そのため、初めて参加したボランティアは、「何をすればよいのか分からない」という戸惑いを抱くこともある。そうした状況において、「好きにやっていいよ」という言葉は、「正解の行動」や「期待される役割」を示すものではなく、自分の関心や得意・不得意、当日の様子に応じて関わり方を選んでよいというメッセージとして受け取られている。実際の場面では、皿洗いや片付けに関わる人、子どもと遊ぶ人、お寺を使ってイベントの企画を考える人など、参加者それぞれが異なる関わり方を選択している。これらの行動は、役割として指示されたものではなく、「自分がやりたい」「今ならできそうだ」と感じ

たことを起点に生まれている。重要なのは、どの関わり方も上下づけられることなく、横並びの役割として受け止められている点である。

このように、「好きにやっていいよ」という言葉は、行動の自由を保障するためだけのものではない。役割を固定せずに運営するおちゃのまにおいて、参加者が自分なりの立ち位置を見つけるための手がかりとして機能している。役割を与えられるのを待つのではなく、自ら場との距離を測りながら関わることを可能にする点に、この言葉の運営上の意義があると考えられる。

5-3 場を支える役割の在り方

本章では、おちゃのまにおける人々の主体的な関わりや柔軟な協働が、どのような役割のあり方によって支えられているのかを検討してきた。おちゃのまでは日常的な場面における多くの役割をあえて固定していない。このように、明確な役割と曖昧な役割が併存する構造が、人々が状況に応じて自ら動く余地を生み出している。

また、SさんやKさんが投げかける「好きにやっていいよ」という言葉に象徴されるように、おちゃのまにおいて参加者は、自分の関心や得意・不得意に応じて関わり方を選択することができる。この言葉は行動を放任するためのものではなく、役割を固定せずに運営するための重要な手がかりとして機能している。

もっとも、役割を固定しない運営は、参加者の自主性や継続的なコミュニケーションを前提とするため、連携の難しさや調整の負担を伴う側面も持っている。それでもなお、おちゃのまがこのあり方を選択しているのは、効率性や管理のしやすさよりも、人々が場との関係の中で自ら考え、関わり方を見出していく過程を重視しているからであるといえる。

以上のことから、おちゃのまにおける役割のあり方は、人を管理するための枠組みではなく、人と人との関係の中で場を成り立たせるための構造として位置づけることができる。

6 おちやのまを支える「想い」と「繋がり」の力

6-1 「好き」という動機が生み出す継続力と包摂力

おちやのまを支える人々の関わり方を振り返ると、その動機に共通して見られるのは、「支援しなければならない」「役割だから続けている」といった義務感よりも、「この場が好きだ」「人と関わることが楽しい」といった感情である。運営者、大学生ボランティア、常連の大人たちのいずれにおいても、この「好き」という個人的な感情が、継続的な関与の原動力となっている点が特徴的である。

大学生ボランティアにおいても、当初は「子どもと関わる経験を積みたい」「居場所の実践を学びたい」といった明確な目的を持って参加する者が多い。しかし、継続的におちやのまに関わるうちに、「ボランティアをするため」ではなく、「子どもと遊ぶのが楽しい」「ここに来ると落ち着く」「この人たちに会いたい」といった感情が参加の動機へと変化していく様子が観察された。このように、「好き」という感情が前面に出ることで、参加は義務的なものではなく、自発的な行為として維持されている。「好き」という感情に起因する関わりは、一見すると私的で不安定なものにも捉えられる。しかし、おちやのまでは、こうした個人的な感情が否定されることなく場に持ち込まれ、重なり合うことで、結果的に多様な人々を包摂する力を生み出している。誰かが「やりたい」と思ったことが尊重され、また「これは苦手だ」「今日は疲れているので静かに過ごそう」という選択も許容されることで、関与の仕方に幅が生まれている。

このように、「好き」という感情を起点とした関わりは、参加の継続性を支えるだけでなく、特定の役割や属性に縛られない包摂的な場を形成する要因となっている。おちやのまにおける継続性は、制度やルールによって担保されているのではなく、人々の感情や関係性に支えられている点に、その特徴があるといえる。

6-2 「曖昧さ」が持つ機能

おちやのまの運営や日常の様子を振り返ると、場全体に共通して「おおらかさ」や「曖昧さ」が意識的に保たれていることが明らかである。参加の仕方や関わり方、役割の担い方について、明確な基準や細かなルールが設けられていない点は、効率性や管理の観点から見れば不十分にも映りうる。しかし、こうした曖昧さは、運営上の未成熟さではなく、多様な人々を受け入れるための姿勢として機能している。

例えば、おちやのまでは「毎回来なければならない」「必ず何かをしなければならない」といった参加条件が存在しない。来られるときに来て、関われる範囲で関わるという柔軟な関与が許容されている。また、活動の中で失敗や行き違いが生じた場合も、それを強く咎め

る雰囲気は見られず、「そういうこともあるよね」と受け止める空気が共有されている。このようなおおらかさは、参加者が過度な緊張や責任感を抱え込むことを防ぎ、場に留まり続ける余地を生み出している。

こうした姿勢は、役割や立場が固定されにくいこととも深く関係している。役割が曖昧であるがゆえに、「うまくできない」「何をすればいいのだろう」と戸惑う瞬間も生じるが、それ自体が排除や評価につながることは少ない。むしろ、関わり方をその都度調整し直すことが前提とされているため、参加者は自分なりのペースや距離感を保ちながら場に関与することができる。こうした姿勢のもとでは、役割は固定されたものではなく、状況や関係性に応じて引き受けたり、手放したりするものとして扱われている。そのため、役割を担うこと自体が負担になりにくく、無理のない形で場に関わり続けることができる。曖昧さによって役割が軽やかに保たれている点は、人々が場から離脱せずに関与を継続するための重要な要素であると考えられる。

このように、「おおらかさ」や「曖昧さ」は、単に優しい雰囲気を生み出すためのものではなく、場から人をこぼれ落とさないようにするための機能を果たしているといえる。明確なルールや成果を求めすぎないことで、「分からない」「今日は関われない」といった状態も含めて受け止める余地が確保されている。その結果として、おちゃのまには、年齢や立場、関与の度合いが異なる人々が同時に、無理なく存在し続けることが可能となっている。

以上のように、おちゃのまにおける「おおらかさ」や「曖昧さ」は、多様な関わりを許容し、関係性を持続させるための運営上不可欠な要素として位置づけることができる。この姿勢が、次節で論じる「支援する・される」という関係構造を超えた居場所像へとつながっていると考えられる。

6-3 関係性の揺らぎが生む居場所の強度

おちゃのまでは、「運営者」「ボランティア」「利用者」といった立場が明確に分けられているわけではなく、それらが重なり合いながら存在していた。ある1人の参加者が、常に同じ立場や役割にとどまるのではなく、状況や関係性に応じて異なる位置づけを行き来している点に、おちゃのまの特徴がある。

例えば、子どもの親として参加していた人が、場に慣れるにつれて見守り役として他の子どもに関わるようになったり、一方で安心感から子供の面倒をゆだねる人も出てくる。大学生ボランティアが子どもと遊ぶ存在であると同時に、他の大人や初参加者の相談相手になる場面も見られる。また、「常連の大人」たちは、明確な役割を担うわけではないものの、日常的に場に居続けることで、結果的に雰囲気を支える存在となっている。このように、個々人の立場は固定されず、多様な立場や関係性を行き来する人々が場を構成している。

この関係性の「揺らぎ」は、「支援する側／支援される側」という二分的な構図を成立しにくくしている。誰かが支援される側に位置づけられ続けるわけではなく、ある場面では支える側であり、別の場面では支えられる側にもなりうる。そのため、関係性が一方向に固定されることなく、相互的で流動的なものとして保たれている。

こうした構造は、居場所としての「強度」にも関わっていると考えられる。役割や立場が固定されていないことで、特定の人物に負担が集中しにくく、また誰かが離れたり、来ることができない日があっても、おちゃのまという場そのものは不安定になりにくい。関係が一对一で結ばれるのではなく、多層的に張り巡らされているため、場は網目状のつながりによって支えられているといえる。

このようにおちゃのまでは、関係性の重なりが場の柔軟さと持続性を支える要素となっている。立場を固定しないことは不安定さを伴う一方で、人々が関係の中で役割を編み直し続けることを可能にし、結果として特定の人間への依存を回避することに繋がり、居場所としての強度を高めていると考えられる。

6-4 居場所が果たすべき役割の再検討-「共に」場を作る意識-

これまでの居場所研究や地域福祉の実践においては、「支援する側」と「支援される側」という二分的な関係構造が前提とされることが多かった。特に、子どもや高齢者、困難を抱える人々を対象とした実践では、居場所は「支援を提供する場」として位置づけられ、その中で関係性が固定化されやすいという課題が指摘されてきた。

一方で、本研究で取り上げたおちゃのまの実践は、こうした構図とは異なるあり方を示している。おちゃのまでは、誰かが一方的に支援を行うのではなく、「一緒に食べる」「一緒に動く」「一緒に場を整える」といった日常的な行為や責任が伴う役割を通して、人々が同じ場に居合わせている。そこでは、支援する側とされる人も、支援される側とされる人も、固定された立場にとどまることなく、関係の中で役割を行き来している。

それを支えると考えられるのは、地域食堂と子どもの居場所であるおちゃのまが同時並行で開催されている点である。この構造は地域食堂での食事の提供を「支援」として切り離すのではなく、日常の延長として位置づける効果を持ち、「支援する／支援される」という二分的な関係が前面化しにくい関係性を支えていると考えられる。この構造は、支援の必要性を否定するものではないが、それを前面に押し出さないことで、関係性が上下に固定されることを避けている。

また、前節まで述べてきたように、おちゃのまでは役割や立場が流動的であり、人々の関係性は多層的に重なり合っている。こうした構造のもとでは、「助ける・助けられる」という2項対立な関係よりも、「共に場をつくる」「共に過ごす」という感覚が共有されやすい。つまりおちゃのまは、特定の誰かを支援するための装置というよりも、人々が関係の中

で存在し続けるための基盤として機能しているといえる。

以上のことから、おちゃのまの实践は、居場所を「支援を提供する場」として捉える従来の枠組みに対し、「共に場をつくる関係性の集積」として再定義する可能性を示している。支援を目的化するのではなく、共に過ごし、共に動く中で結果として支え合いが生まれるというあり方は、今後の居場所づくりや地域实践を考える上で重要な視座を提供するものである。

7 おわりに

本研究では、子どもの居場所と地域食堂を併設する「おちゃのま」を事例として、居場所づくりの実践において、場を支える人々の「想い」や「関係性」がどのように影響しているのかを明らかにすることを目的としてきた。従来の居場所研究や地域福祉の議論では、制度的な枠組みや運営上の課題、人手不足といった問題が指摘される一方で、場を運営・支える人々の属性や想いに焦点を当てた分析は必ずしも十分ではなかった。そこで本研究では、運営者、大学生ボランティア、常連の大人たち、子どもたちといった多様な担い手の関わりやおちゃのまの運営スタイルに着目し、実践の内側から居場所を捉え直した。

第3章では、「おちゃのま」を支える人々に着目し、運営スタッフ、大学生ボランティア、常連の大人たち、一期一会の大人たちといった多様な担い手の関わり方を描いた。それぞれが固定された役割を担うのではなく、立場や関与の度合いを行き来しながら場を支えていることを明らかにした。

第4章では、子どもたちの存在の捉え方に焦点を当て、おちゃのまにおける子どもたちが「お客さん」や「支援される存在」としてではなく、場を共に支え、共につくる存在として位置づけられていることを示した。また、「一緒にやる」関係性を通して、自由と責任が両立する関わり方が形成されている点を明らかにした。

第5章では、こうした主体的な関わりがどのような運営構造によって支えられているのかを、「役割」のあり方から検討した。明確な役割と曖昧な役割が併存する構造や、「好きにやっていいよ」という言葉が果たす機能を分析し、役割を固定しすぎない運営が人々の自律性と協働を可能にしていることを示した。

第6章では、これまでの分析を踏まえ、おちゃのまを支える人々の「想い」や「価値観」に着目した。「好き」という感情に基づく関与や、おおらかさ・曖昧さを受け入れる姿勢が、場の継続性や包摂性を支えていることを明らかにするとともに、居場所を「支援する場」から「共に場をつくる関係性の集積」として捉え直す可能性を示した。

以上のことから、居場所づくりの実践においては、制度や支援の枠組みだけでなく、場を支える人々の想いや関係性のあり方が、居場所の質や持続性に大きな影響を与えていることが示された。おちゃのまの実践は、居場所を「支援を提供する場」として捉える従来の枠組みを相対化し、人々が役割を行き来しながら「共に場をつくる関係性の集積」として居場所を再定義する可能性を提示している。

また本研究には課題も残されている。第一に、本研究は一つの居場所を対象とした事例研究であり、他の居場所との比較分析を行っていない点である。今後は、異なる運営形態や理念を持つ居場所との比較を通じて、本研究で得られた知見の一般性や限界を検討する必要がある。第二に、「好き」や「おおらかさ」といった感情的・価値的な要素を、どのように位置づけるのかという点である。これらの要素は居場所の実践において重要である一方で、分析概念としての整理にはさらなる検討が求められる。

謝辞

本論文の作成にあたり、多くの方々にご協力いただきました。

おちやのま責任者の S さん、北海寺住職の K さんには、インタビュー調査のお願い並びにおちやのまでの観察を快くお引き受けいただきました。また、共に活動した大学生ボランティアの皆様を始め、おちやのまに訪れる方々には、度々の質問に対応していただきました。皆様のお力添えを賜り、充実した調査を実現することができました。本当にありがとうございました。

そして、終始熱心かつ丁寧な指導をしていただきました指導教員の宮内泰介先生、副指導教員の林琢也先生をはじめ、地域科学研究室の先生方には、研究の方向性や研究手法、論の展開などに関して数多くの助言をいただき、心より感謝しております。先生方の言葉により得られた気づきは、私の研究において欠かせないものでした。また、地域科学研究室のメンバーには、行き詰った際に鼓舞していただき、本当にありがとうございました。

改めて、本論文の作成にご協力いただいた皆様に、心より感謝申し上げます。

参考文献

【参考文献】

執行治平, 大津恵実, 寺田純子, 2024, 「青少年の育ちを支える「居場所づくりの方法論」の解明にむけて一日常の関わりに対する会話分析的な観察から一」『社会教育学研究』(60) 2 号 pp43-50

木村直子, 2024, 「子どもの居場所」が育む「家族」と「地域」『家族関係学』(43) pp13-23

斎尾直子・長谷夏哉, 2007, 「都市における児童の居場所づくりの多用化と安心安全―豊かな空間確保 両立についての考察」『日本建築学会論文集』614 : 33-39

滝口克典, 2024, 「〈居場所づくり〉実践の冗長性確保に関する一考察 若者支援 NPO 「ぷらっとほ一む」の活動史 (2003-2019) を事例に」『東北芸術工科大学紀要』(31) pp1-24

滝口克典, 2023, 「〈居場所づくり〉実践者の「学びあうコミュニティ」はどのようにスタッフを育てているか―南東北・居場所スタッフ合同研修 (2002 - 18 年) を事例に」『山形大学 教職・教育実践研究』(18) pp31-42

萩原建次朗, 2009, 「子ども・若者にとっての居場所の意味再考--身体的自己の抑圧と生成の

関係構造分析から」『立教大学教育学科研究年報』(53) pp65-77

松岡是伸、2017、「名寄市における子どもの学習支援・子ども食堂・子どもの居場所づくりの
実践 ―地域における各機関・団体の連携とスティグマの払拭を願って―」『名寄市
立大学コミュニティケア教育研究センター 年報』第1号（通巻35号） pp109-124

松岡是伸、2018、「名寄市における子どもの学習支援・子ども食堂・子どもの居場所づくり
の実践―年度の実践活動を中心にして―」『名寄市立大学コミュニティケア教育研究
センター年報』第2号（通巻号） pp117-125

森瑞希、2019、「社会的居場所での支援と循環する承認・ケア―参与観察と研究サーベイを
踏まえた問題提起―」『社会政策』(11) 第2号 pp72-84

山下智也、2007、「子どもと地域を繋ぐ子ども参画のあり方：日常的な子どもの遊び場「き
んしゃいきやんぱす」の事例から」『日本生活体験学習学会誌』7：1-15

【参考 Web サイト】

NPO 法人 E-LINK ホームページ <https://adventureclubsapporo.com/>
(2025 年 12 月 5 日閲覧)

ほっかいどう若者応援★プロジェクトホームページ
<https://h-wakamono-ouen.amebaownd.com/>
(2025 年 12 月 5 日閲覧)